

佐賀新聞 2010(平成22)年5月29日(土) 県内文化欄 文化時評2010 【美術】

7

さが文化

2010年(平成22年)5月29日(土曜日)

佐

美術

野中 耕介

「記憶にのこる・佐賀の美術家たち 佐賀県立美術館「レクシオン」による」展（佐賀県立美術館）が、今月23日をもって終了した。私たちが美術館学芸員は作品の展示を担当したが、オーブンの前日、会場を見渡しながら同僚のひとりがつぶ

残る「顕彰すべき対象として位置づけられた作家の作品である。かれらの存在と業績が、文団協（佐賀県文化団体協議会）の活動を支え、後継を育み、佐賀の美術に活況をもたらす原動力となった」とは紛れもない事実である。 展覧会を訪れた方々の中には、かつての恩師の面影と深い恩情を思い出しながら、作品を懐かしく見つめた人も多かっただろう。そ

奇妙な穏やかさとは

やいた一言が忘れがなく、私の耳に残っている。「これが佐賀の（美術史の）眺めか…向ともはや、穏やかだね…」。その感心とも嘆息ともつかぬ語調に、思わずはっとした。私も胸中の片隅に、同じような印象を抱いていたからである。

これは限りなく尊いことである。だが一方で今、かれらの作品を造形の面から見つめ論じれば、その純粹でひたむきな創作の態度とは裏腹に、かつて評論家田中艸太郎氏が「県内在住芸術家の問題」(『新郷土』昭和49年12月)で語った「芸術の無限性」を証明しうるだけの創作をなした作家がどれほどいるのだろうか、という疑問に突き当たると、伝統や時代、時流一例えば公募団体展や、「地方」

(県立美術館学芸員)

県内文化

文化時評 2010